

おばあちゃんの手



高知 六年 さやか

私はいつもおばあちゃんのとおりでねている。おばあちゃんの手をにぎりながらねている。

六月二十五日の夜、ふとんに入ったときのことだった。私は自分の布団の横から手を出しおばあちゃんの手をに入れて、おばあちゃんの手を探した。そして、おばあちゃんの手を布団の中にぎっしり握った。おばあちゃんの手は温かかったけど、少しはれている感じがした。

おばあちゃんの手をなして布団から出した。そして手を上にあげて私に見せた。しわがいつぱいの手だった。おばあちゃんは、「ほら手はれちゅうろう？ もんでや。」

と言った。おばあちゃんは時々私に、そんなことを言う。その日も言われたからもんであげることにした。

「うん。」

と言って、私は起きた。おばあちゃんは、

「腰がいたい。」

と言いながらゆっくりと起きた。

私はおばあちゃんの手を両手ではさんでもんであげた。

「今日は庭のそうじをしたき、手はれた。」

とおばあちゃんが言った。年がいくと、手や指とかがいたくなるんだろうと思いつつももんであげた。

おばあちゃんは六十一。今は仕事にいいないけれど、前は、大豊町の津家の大末建設のまかない婦をしていた。まかない婦というのは、道路工事やトンネルをほるために仕事に行っている男の人たちにご飯やおかずを作ったり、お風呂を洗ったりする仕事だ。私はおばあちゃんが仕事をしていたところについて行ったことがある。おばあちゃんは、あせをいっばいかいて仕事をしていた。私は時々外に出て花をつんだりしていたことを覚えている。

私は手をもみながら、おばあちゃんの手はしわだらけだけど、そのしわ

には、うれしかったことやつらかったことがつまっているのではないかと思っただ。おばあちゃんに、

「今までの中で一番うれしかったことは何？」

と私が聞くと、おばあちゃんは、

「えみさんが生まれてあんたのお母さんが生まれた。けど、男の子の茂が生まれたことがうれしかった。」

と答えた。

えみさんというのは、私のお母さんのお姉さんで、茂というのはお母さんの弟だ。私は、もし女の子ばかりだったら、おばあちゃんはとうだったのだろうと思っただ。

次に、

「つらかったことは何？」

と聞くと、おばあちゃんは、

「貧ぼうで昔、学校へいけんかったこと。おばあちゃんのお母さんが病氣やってかん病しよったき行けんかったし、貧ぼうで学校へ行けんかった。勉強についていけんなって学校へ行くのがいやになったとがつらかった。」と、もう一方の自分の手を見ながら言った。私は、そんなことがあったのかと思ひながらおばあちゃんの手をもんだ。

すると、おばあちゃんが、

「気持ちいい。」

と言ってくれた。だから、もっと気持ちよくもんであげようと思ったけど、おばあちゃんは、

「もうえいで。」

と言っただ。私は、もっとおばあちゃんの手をもんであげたかったけど、おばあちゃんから手をはなした。おばあちゃんは、

「おーいしょ。」

と言ひながら布団に寝ころんだ。私も布団に入った。そして、

「電気消すで。」

と言うと、おばあちゃんは、

「消しや。」

と言っただ。私はけい光灯からぶら下がっているひもを引っぱった。

けい光灯を消すと、外から外灯の光が部屋に入ってきた。その光で、ベランダの手すりの影がおし入れのふすまに映った。

私は布団から手を出して、おばあちゃんの手の中をさぐり、また手にぎってあげた。

(指導 坂田次男)